

特集：卒業

生物学類を巣立つ皆さんへ

佐藤 忍（筑波大学 生物学類、生物学類長）

皆さん卒業おめでとうございます。91人の卒業生に学位記を手渡す事ができて大変嬉しく思います。皆さんはほとんどが2006年度入学です。ここでこの4年間を振り返ってみましょう。

まず生物学の世界に目を向けてみると、2003年にはヒトゲノムの解読があり、それまで様々な生き物のゲノム解読が進んだこととあわせて、生物学はポストゲノム時代へと突入しました。その1つのあらわれとして、2007年に京都大学でiPS細胞が開発され、2008年には下村博士がGFPでノーベル化学賞を受賞されたことは記憶に新しいところです。皆さんが本学に在学したこの21世紀の初めは、生物学の方法論の大転換の年として後世に残ることでしょう。また、環境関係では、2007年にIPCCと米国のゴア氏が地球温暖化防止の啓蒙活動に対してノーベル平和賞を授与され、2008年からは脱化石燃料の推進が1つの流れとなり、研究や仕事、生活にまで影響を及ぼして来ています。これからはばらばら、再生医療とグリーンエネルギーの時代が続く事でしょう。

一方、国立大学は2004年に国立大学法人へと移行し、今までの国の一機関から独立し、私立大学と同様な独立した機関となりました。そこでは、大学としての目標や財務状況など、説明責任が問われるようになりました。国立大学も切磋琢磨の時代を迎えたのです。筑波大学では学群の見直しが行われ、皆さんは第二学群の最後の学年となりました。

そのような中で生物学類は、2つの大きなチャレンジを行ってきました。その1つが成績評価基準の設定と成績評価の厳密化です。学生の努力と能力を適切に評価するための取り組みは、単位の実質化という文部科学省からの要求に応えるとともに、学生のやる気をエンカレッジする事を目指したものです。また2009年には、筑波大学生物学類において国際生物学オリンピックを開催しました。学生諸君の絶大なる協力のもと大成功のうちに終了し、筑波大学の学生の素晴らしさを世界にアピールすることができました。これからも2年ごとの生物チャレンジ2次試験実施をとおして、生物学オリンピックにコミットしていく事になります。さらに2010年からはグローバル30（外国人留学生のための英語プログラム）を生物資源学類と地球学類との共同で開設します。生物学類では植物、生態、海洋、遺伝に関連した科目を英語で開設するのみならず、日本人対象の既存のこれらの科目も日本語では行わない事になります。日本人学生の国際性を引き上げる事を目的とした何とチャレンジングなプログラムでしょう。皆さんが4年間を過ごした生物学類はこのように絶えず挑戦を続ける学類です。そのような生物学類を卒業したことを誇りに思って、生物学類の今後をぜひ見守って行って下さい。

皆さんは、このような凄まじい変化の時代に大学生活を送ってきました。周りも変化していますが、実は一番変わったのは皆さん自身です。特に4年生の1年間、研究室で研究に従事する

事で科学に対する見方が変わったのではないかと思います。自分も変わるし周りも変わる、このような大きな変化の中で私達はどう生きていったら良いのでしょうか。私は、「自分に対する自信と誇り」を持つことだと思います。自信は自分自身を信ずる事、誇りはその自信を外に向かってアピールする事です。まだ自分を知らないと言われるかもしれませんが、それこそが若者の特権です。自分に対する自信は過去の自分からのみわいてくるとは思いますが、「自分で思い描く将来の自分の成功のイメージ」を信じていることが最も大切だと私は思います。仕事、家庭、人生における将来の自分の望ましいイメージをずっと持ち続けること、これは大変なことですが、それこそが成功につながるのだと思います。皆さんは大変優れているし、人に誇れる点をたくさん持っています。自分に合ったやり方、自分のメリットを早く見つけて、この筑波大学生物学類を卒業した自分に誇りを持ってこれからの人生を歩んでいってください。

最後になりますが、皆さんがここ筑波の地を集って過ごした4年間は二度と取り戻せません。教員や学友、サークルでの友人、さらには学問や様々な経験との出会いを今後の肥やしにしていってください。大学時代の友人は一生の宝です。連絡を絶やさずネットワークを維持していってください。

皆さんは本日、大学院生や社会人として新たな道を歩かれます。それぞれの道で自分なりの高い目標を掲げ、挑戦していきましょう。後に残る我々教員一同は皆さんの将来に大いに期待しています。卒業おめでとう。

Contributed by Shinobu Satoh, Received April 14, 2010.